

## 小児看護学における「子どもと触れ合う」演習の学び

網野裕子, 沖本克子

保健福祉学部看護学科

本研究は、本学の小児看護学で導入している「子どもと触れ合う」演習後のレポートを質的帰納的に分析することにより、「子どもと触れ合う」演習における学生の学びを明らかにし、より効果的な学習への検討を行うことを目的とした。分析の結果、【子どもの反応】【子どもと遊ぶことによって得られた学びと思い】【子どもの特性】【子どもにおける他者との関わり】【子どもの発達】の5カテゴリーが抽出された。これらの結果より、学生は「子どもと触れ合う」演習を通して、子どもの遊びの特徴や意義、成長発達の実際、成長発達に応じた遊び・コミュニケーション等について学び、子どもの理解を深めていることが明らかになった。

キーワード：小児看護学, 演習, 子ども, 学生, 学び

## I. はじめに

小児医療は、医療費の不採算や経営合理化の中、外来や在宅での治療が可能になったことや、長期入院の精神発達面の影響を考慮して在院日数が短縮化し、在宅医療へ移行する傾向にある（中野，2007）。本学の小児看護学実習で受け持つ患児の在院日数も短縮化されてきているのが現状である。しかし、近年、少子化・核家族化により、日常生活の中で直接的に子どもと触れ合う体験をしている学生は少なく、「子ども」をイメージすることに困難を感じる学生が多い。伊藤は、7～8割の学生がプラスの子どもイメージを持っていたと報告している（伊藤，2006）。また、野村は、学生の子どもの関心は高いが、そのイメージは、子どもとの浅い関わりや外観から得られるイメージであったと報告している（野村他，2007）。このように、リアルな子どものイメージがわからない学生は、短い小児看護学実習の受け持ち期間の中で

子どもを理解し、看護を展開していくことに苦慮している。小児看護を実践するうえで、対象である子どもを理解することは非常に重要である。

中嶋らは、子どもとの接触体験の多さが初学者の子どものイメージ形成につながり子どもの理解に影響するため、子どもをありのままに理解できるように学習内容を工夫することが必要であると報告している（中嶋他，2005）。

本学では、子どもの健康レベルと成長発達に応じた看護実践ができるための基礎的知識と技術を学ぶことをねらいとして、3年次前期に小児看護学Ⅱを開講している。その一環として、遊びの意義や成長発達に応じた遊び・コミュニケーションについて学ぶことを目的に、「子どもと触れ合う」演習を行い、終了後にレポートの提出を求めている。そこで本研究では、小児看護学における「子どもと触れ合う」演習後のレポートを分析することにより、「子ど

もと触れ合う」演習における学生の学びを明らかにし、より効果的な学習への検討を行うことを目的とした。

## II. 方法

### 1. 演習方法

1) 本演習の位置づけ：本学学生は、2年次の小児看護学Ⅰ（30時間・2単位）、3年次の小児看護学Ⅱ（45時間・2単位）を終了後、3年次後期～4年次前期に5～7名ずつ7グループに分かれ小児看護学実習（135時間・3単位）を行う。「子どもと触れ合う」演習は、3年次の小児看護学Ⅱの初期に行っている。それに先立ち、演習で使用する「おもちゃの作成」演習も行っている。「おもちゃの作成」演習では、「子どもと触れ合う」演習に参加する子どもの年齢にあわせて、発達段階や危険防止を考慮しながら、1グループ4名の学生でおもちゃを作成している。

2) 演習の参加者：今回の演習の参加者は、2歳児女児1名、4歳児男児1名、5歳児女児1名、およびそれぞれの子どもの母親3名であった。

3) 演習の流れ：子ども1名に対して1グループ4名の学生を配置した。1グループが子どもと触れ合う時間は20分であり、これを1セッションとした。休憩をはさみながら、学生全員が子どもと触れ合えるように4セッション行った。演習後、学生は、演習の振り返りとしてレポートを作成した。演習場所は学内演習室とし、ござとプレイマットを敷いて場を設定した。

### 2. 研究方法

1) 研究デザイン：質的帰納的研究

2) 調査対象：A大学小児看護学Ⅱを履修

した学生で、「子どもと触れ合う」演習後のレポート記録を作成した学生40名のうち、研究への同意が得られた37名分を対象とした。

3) 調査期間：2017年12月

4) 調査方法および分析方法：「子どもと触れ合う」演習後のレポート記録（1人につきA4用紙1枚）の自由記載をデータとし、意味内容の類似性のあるものを分類し、質的帰納的に分析を行った。研究結果の信頼性と妥当性を高めるため、研究過程においては共同研究者間で合議した。

5) 倫理的配慮：対象者へ研究説明書、同意書、同意撤回書を配布したうえで、研究の背景と目的、研究の方法、データの匿名化、研究への参加は自由意志によるものであり不利益は生じないこと、研究結果の公表、同意後も同意撤回が行える旨を説明した。分析は、成績評価を出したあとに行った。なお、本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

（承認番号：17-61）

## III. 結果

分析の結果、5カテゴリー、37サブカテゴリー、334コードが抽出された（表1）。

以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >, 代表的なコードを「 」で示す。

### 1. 【子どもの反応】

<遊び・おもちゃに対する喜び><自分で遊びを展開してゆく><遊び・おもちゃに対する戸惑い><想定外の遊び><成長発達に応じた遊び><興味が次々にうつる>の6サブカテゴリー、64コードで

構成されていた。代表的なコードは、〈遊び・おもちゃに対する喜び〉では「ルールを達成してゆくことに喜びを感じる」、〈自分で遊びを展開してゆく〉では「自らルールのある新しい遊びを考えて遊ぶ」、〈遊び・おもちゃに対する戸惑い〉では「学生が遊んでいるのを見て、ようやく興味を示す」、〈想定外の遊び〉では「おもちゃを組み合わせで新しい遊び方を発見する」、〈成長発達に応じた遊び〉では、「見立て遊びをする2歳児」、〈興味が次々にうつる〉では「次々に関心の対象が変わってゆく」などであった。

## 2. 【子どもと遊ぶことによって得られた学びと思い】

〈遊びには工夫が必要〉〈自分たちが作成したおもちゃで子どもと遊ぶことによる嬉しさと達成感〉〈成長発達に応じたおもちゃ・遊びが大切〉〈作成したおもちゃで遊ぶことによって感じた危険と防止策〉〈不安が安心へと変わる〉〈子どもの成長発達を促すための遊びの重要性を知る〉〈子どもと遊ぶことは難しい〉〈子どもとの遊び方・接し方を知る〉〈子どもを一人の人として接することの大切さ〉の9サブカテゴリー、108コードで構成されており、このカテゴリーの記述が一番多かった。代表的なコードは、〈遊びには工夫が必要〉では「遊びの最中に、褒めたり効果音を出すと、遊びが楽しくなる」、〈自分たちが作成したおもちゃで子どもと遊ぶことによる嬉しさと達成感〉では「作成したおもちゃを気に入ってくれた子どもを見て湧き上がった嬉しいという感情」、〈成長発達に応じたおもちゃ・遊

びが大切〉では「成長発達段階にあった遊びによって、子どもは試行錯誤をすることができる」、〈作成したおもちゃで遊ぶことによって感じた危険と防止策〉では「子どもが使わないだろうと思うものに対しても、安全対策を行うことが必要」、〈不安が安心へと変わる〉では「おもちゃに対する子どもの反応を見て、不安が安心に変化する」、〈子どもの成長発達を促すための遊びの重要性を知る〉では「遊びは子どもの発達を促すための重要な場であると実感する」、〈子どもと遊ぶことは難しい〉では「子どもの興味を引くことは難しい」、〈演習を通して子どもとの遊び方・接し方を知る〉では「実際に子どもと遊んだことにより、子どもの興味や遊び方が分かる」、〈子どもを一人の人として接することの大切さ〉では「その人を知ろうとすることが、よい関係を築くために大切」などであった。

## 3. 【子どもの特性】

〈子どもは好奇心旺盛〉〈予想以上だった子どもの能力の高さ〉〈個性がある〉〈発想力が豊か〉〈身体全体を使った感情表現〉〈母親の存在が大きい〉の6サブカテゴリー、31コードで構成されていた。代表的なコードは、〈子どもは好奇心旺盛〉では「行動的で好奇心旺盛な子ども」、〈予想以上だった子どもの能力の高さ〉では「遊びの上達が早い子どもを見て、予想していたよりも能力が高いと感じる」、〈個性がある〉では「子どもひとりひとり遊びの特徴が異なる」、〈発想力が豊か〉では「自分達が考えていた以上の遊び方をする、子どもの発想力の豊かさに驚く」、

＜身体全体を使った感情表現＞では「勝ったときは身体全体で喜び、負けたときは何も言わないで再開するという子どもの表現」、＜母親の存在が大きい＞では「遊んでいて嬉しいことがあると、母親へ一番に報告している子どもの姿から、母親の存在の大きさを感ずる」などであった。

#### 4. 【子どもにおける他者との関わり】

＜配慮を示す年長児＞＜発達段階によって異なる他者との関わり＞＜模倣＞＜学生の働きかけに対して反応する＞の4サブカテゴリー、36コードで構成されていた。代表的なコードは、＜配慮を示す年長児＞では「みんなが楽しく遊べるよう配慮をする年長児」、＜発達段階によって異なる他者との関わり＞では「集団での遊びに適した行動をしている4歳児」、＜模倣＞では「子どもは周囲の行動に興味をもち真似をしたがるということを学ぶ」、＜学生の働きかけに対して反応する＞では「声をかけると嬉しそうに遊ぶ2歳児」などであった。

#### 5. 【子どもの発達】

＜年齢による発達の差＞＜全身運動・身体バランスの発達＞＜発達段階による会話の違い＞＜言語の発達＞＜手指の発達＞＜認識力の発達＞＜社会性の発達＞＜予想以上の子どもの動きや強い力＞＜一般的な成長発達と触れ合った子どもの成長発達との比較＞＜言語獲得の発達途中にいる子ども＞＜子どもの発達を促す環境＞＜日々の関わりや経験が子どもの発達に繋がる＞の12サブカテゴリー、95コードで構成されていた。代表的なコ

ードは、＜年齢による発達の差＞では、「子どもの1歳差は成長発達において大きな差」、＜全身運動・身体バランスの発達＞では、「活発に動き回る4歳児」、＜発達段階による会話の違い＞では「質問には答えてくれるが、黙々と遊ぶ2歳児」「自分のしたいことを学生にはっきり伝える5歳児」、＜言語の発達＞では「遊びを通して、2語文でお話をする2歳児」、＜手指の発達＞では「指先の動きが発達している2歳児」、＜認識力の発達＞では「お手本を少し見ただけで習得する子どもの様子から感じた知能の発達」、＜社会性の発達＞では「片付けや手伝いをする子どもの様子は、社会的自我の発達の表れ」、＜予想以上の子どもの動きや強い力＞では「子どもの速さと強さは、自分の予想以上」、＜一般的な成長発達と触れ合った子どもの成長発達との比較＞では「教科書と同じように成長発達している2歳児に感動する」、＜言語獲得の発達途中にいる子ども＞では「子どもは大人が使っている言葉をそのまま使うため、注意が必要」、＜子どもの発達を促す環境＞では「子どもの発達は環境などが大きく影響している」、＜日々の関わりや経験が子どもの発達に繋がる＞では「子どもの日々の生活の体験がイメージとして遊びにつながっている」などであった。

## IV. 考察

### 1. 「子どもと触れ合う」演習に対する子どもの反応と学生の学び

子どもは、年齢発達に応じたおもちゃや興味をもった遊びに対しては積極的に遊ぶが、そうでない場合は、なかなか遊ぼう

表1. レポートから抽出した学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー ( )内はコード数	代表的なコード
子どもの反応	遊び・おもちゃに対する喜び(17) 自分で遊びを展開してゆく(16) 遊び・おもちゃに対する戸惑い(10) 想定外の遊び(8) 成長発達に応じた遊び(7) 興味が次々にうつる(6)	ルールを達成してゆくことに喜びを感じる 自らルールのある新しい遊びを考えて遊ぶ 学生が遊んでいるのを見て、ようやく興味を示す おもちゃを組み合わせで新しい遊び方を発見する 見立て遊びをする2歳児 次々に関心の対象が変わってゆく
子どもと遊ぶこと によって得られた学び と 思い	遊びには工夫が必要(20) 自分たちが作成したおもちゃで子どもと遊ぶこと による嬉しさと達成感(17) 成長発達に応じたおもちゃ・遊びが大切(15)  作成したおもちゃで遊ぶことによって感じた危険と 防止策(15) 不安が安心へと変わる(11) 子どもの成長発達を促すための遊びの重要性を 知る(10) 子どもと遊ぶことは難しい(9) 子どもとの遊び方・接し方を知る(8)  子どもを一人の人として接することの大切さ(3)	遊びの最中に、褒めたり効果音を出すと、遊びが楽しくなる 作成したおもちゃを気に入ってくれた子どもを見て湧き上がった 嬉しいという感情 成長発達段階にあった遊びによって、子どもは試行錯誤をする ことができる 子どもが使わないだろうと思うものに対しても、安全対策を行う ことが必要 おもちゃに対する子どもの反応を見て、不安が安心に変化する 遊びは子どもの発達を促すための重要な場であると実感する  子どもの興味を引くことは難しい 実際に子どもと遊んだことにより、子どもの興味や遊び方が 分かる その人を知ろうとすることが、よい関係を築くために大切
子どもの特性	子どもは好奇心旺盛(16) 予想以上だった子どもの能力の高さ(4)  個性がある(4) 発想力が豊か(3)  身体全体を使った感情表現(3)  母親の存在が大きい(1)	行動的で好奇心旺盛な子ども 遊びの上達が早い子どもを見て、予想していたよりも能力が 高いと感じる 子どもひとりひとり遊びの特徴が異なる 自分達が考えていた以上の遊び方をする、子どもの発想力の 豊かさに驚く 勝ったときは身体全体で喜び、負けたときは何も言わないで 再開するという子どもの表現 「遊んでいて嬉しいことがあると、母親へ一番に報告している 子どもの姿から、母親の存在の大きさを感じる
子どもにおける 他者との関わり	配慮を示す年長児(13) 発達段階によって異なる他者との関わり(10) 模倣(8)  学生の働きかけに対して反応する(5)	みんなが楽しく遊べるよう配慮をする年長児 集団での遊びに適した行動をしている4歳児 子どもは周囲の行動に興味をもち真似をしたがるということ を学ぶ 声をかけると嬉しそうに遊ぶ2歳児
子どもの発達	年齢による発達の差(13) 全身運動・身体バランスの発達(13) 発達段階による会話の違い(13)  言語の発達(10) 手指の発達(10) 認識力の発達(9)  社会性の発達(7)  予想以上の子どもの動きや強い力(6) 一般的な成長発達と触れ合った子どもの成長発 達との比較(4) 言語獲得の発達途中にいる子ども(4)  子どもの発達を促す環境(3) 日々の関わりや経験が子どもの発達に繋がる (3)	子どもの1歳差は成長発達において大きな差 活発に動き回る4歳児 質問には答えてくれるが、黙々と遊ぶ2歳児、自分のしたいこ とを学生にははっきり伝える5歳児 遊びを通して、2語文でお話をする2歳児 指先の動きが発達している2歳児 お手本を少し見ただけで習得する子どもの様子から感じた 知能の発達 片付けや手伝いをする子どもの様子は、社会的自我の発達の 表れ 子どもの速さと強さは、自分の予想以上 教科書と同じように成長発達している2歳児に感動する  子どもは大人が使っている言葉をそのまま使うため、注意が 必要 子どもの発達は環境などが大きく影響している 子どもの日々の生活の体験がイメージとして遊びにつながって いる

としない。また、ひとつのおもちゃで遊んでいても、次々に関心の対象がうつっていた。また、ただおもちゃで遊んでいるのではなく、自分で遊びを展開しており、さらに学生が思いもよらなかった遊び方を行っていた。このように、学生は、自分達で工夫し作成したおもちゃで遊ぶ子どもの、生の反応を捉えていた。また、実際に自分達が作成したおもちゃで子どもと遊んだことにより、子どもにとっての遊びの意義や成長発達に応じた遊びの重要性を実感していた。これは、学生が自分達で試行錯誤しながら作成したおもちゃで子どもと遊んだからこそ、真剣に子どもの反応を捉えられたためではないかと考える。学生は安全なおもちゃを念頭に置きながらおもちゃを作成したにもかかわらず、子どもと関わる上で、危険な箇所を発見し、防止策を検討していた。上山他は、「遊び道具が充実している」子育てカレッジでの実習で、「保護者や保育士の関わりを通して危険に対する安全教育を学ぶことは、発達段階の学びと併せて必要な実習体験である」と報告している（上山他，2015）が、「学習は学習者が回答を選択するときと比べて、回答を自ら生成したときに強化される」（向居他，2011）ことから、より子どもの安全管理について学習できたのではないかと考える。

## 2. 「子どもと触れ合う」演習における学生の子どもの理解

学生は、実際に子どもと触れ合ったことにより、子どもの特性を知り、その特性に触れたときの自分の感情を「驚いた」と表現している。これは、今までの不明瞭な子

どもイメージから、リアルな子どもイメージへの転換を示していると考えられる。また、学生は、学生と子どもの関わりや子ども同士の関わりの実際にも目を向け、発達段階によって他者との関わりが変化することや、子どもは模倣することによって発達していくことを捉えていた。「子どもは周囲の大人の関わりを必要とする存在である」（上山他，2015）が、子ども同士の関わりもまた必要とする存在であることを、学生は見出していたと考えられる。服部は、「子どもはごく自然に、父親や母親のしぐさや言葉遣いや振る舞い、また種々の職業人の特徴などを模倣する」と述べており（服部，2000）、学生は演習からそのことを学んでいたと考えられる。さらに、学生は、子どもの運動（粗大運動、微細運動）、言語、社会性などの発達の実際を捉えたうえで、発達を促す環境や、日々の経験が子どもの発達に繋がると学んでいた。「遊びは、子どもにとってもっともふさわしい『修行』でもあり、そこから子どもは世の規範を学ぶ心や道徳心を育てていく」と服部は述べている（服部，2000）。学生は今回の演習を通して、遊びという子どもの発達環境の土壌を感じ取っていたのではないだろうか。

## 3. 「子どもと触れ合う演習」の意義と今後の課題

今回の「子どもと触れ合う」演習は、学生自身で発達段階と危険防止を考慮したおもちゃを作成し、そのおもちゃを使用して子どもと触れ合った。「学習すべき材料に能動的に関わることを学習者に要求する方略は、消極的な活動とくらべて、学

習材料の長期保持をもたらす」と向居他は述べている(向居他, 2011)。よって、今回の演習を通して得た子どもの理解は、半年後から始まる小児看護学実習で活かされるのではないかと期待している。今回の演習は、参加した子どもが3人と少なく、触れ合うことができる時間も短かった。吉川らは、1組の赤ちゃん・母親に対し1～2名の学生を配置した演習を行うことにより、学生一人一人が主体的に子どもに深く関わっていたことを報告している(吉川他, 2016)。より一層の子ども理解を深めることができるよう、触れ合う子どもの数を増やすこと、この演習以降にも子どもと触れ合う機会を設けていくことが、今後の課題である。

## V. まとめ

小児看護学における「子どもと触れ合う」演習後のレポートを分析した結果、【子どもの反応】【子どもと遊ぶことによって得られた学びと思い】【子どもの特性】【子どもにおける他者との関わり】【子どもの発達】の5カテゴリーが抽出された。これらの結果より、学生は「子どもと触れ合う」演習を通して、子どもの遊びの特徴や意義、成長発達の実際、成長発達に応じた遊び・コミュニケーション等について学び、子どもの理解を深めていることが明らかにな

った。

## 付記

演習および調査にご協力くださいました皆様に、深く感謝申し上げます。

## 文献

- 服部祥子(2000)生涯人間発達論:第2版, 医学書院.
- 伊藤良子(2006)学生が小児看護学履修前に持っている子どもイメージ自由記載レポート内容からの分析一, 市立名寄短期大学紀要, 39: 87-89.
- 向居暁, 佐藤純(2011)25の学習原理一教授法と学習環境デザインのための心理学一, 高松大学研究紀要, 54-55 合併号: 209-230.
- 中野綾美(2017)ナーシング・グラフィカ 小児看護学① 小児の発達と看護:第5版, メディカ出版.
- 上山和子, 山本裕子(2015)子育てカレッジを活用した小児看護学実習の教育評価と課題, 新見公立大学紀要, 36: 7-1.
- 吉川未桜, 青野広子, 田中美樹, 宮城由美子(2016)赤ちゃん先生プログラムを取り入れた小児看護技術演習の効果, 福岡県立大学看護学研究紀要, 13: 81-90.

Nursing students experiences of "interaction with children" in pediatric nursing practice

Yuko Amino, Katsuko Okimoto

Faculty of Health and Welfare Science Department of Nursing

The present study aimed to clarify students' learning through a practice "interaction with children", which is included in our school's pediatric nursing, and discuss more effective learning by qualitatively and inductively analyzing reports on the practice. As a result, we found five categories: 【Child's reaction】 【Learning and thought gained by playing with children】 【Characteristics of children】 【Relationship with others in children】 【Development of children】. The results of our study suggested that, through the practice, students learned about the characteristics and significance of children's play, children's growth and development, as well as play and communication according to the growth and development, and deepened their understanding of children.

Key words:

nursing student, interaction with children, pediatric nursing practice, child, experience